清末における「衛生」概念の展開

余　新忠著
石野一晴譯

緒　言
一　「衛生」の傳統的概念と近代的概念
二　「衛生」概念の變動の始まり（光緒初年―一八九四）
　1　近代日本における「衛生」の形成とその中國に對する初期の影響
　2　西洋衛生知識の流入と「衛生」概念の潛在的變化
三　「衛生」概念の變動の進展（一八九四―一九〇五）
四　近代的「衛生」概念の確立（一九〇五―一九一一）
結　語

緒　言

中國衛生史研究は近年注目を集め盛んになりつつあるものの、それでもなお蓄積の少ない分野である。さらにその數少ない研究成果も、近代以來の中國における衛生機構の導入と確立とに集中している。衛生という言葉そのものは大變古くから存在しているが、近代とそれ以前においては意味するところが大きく異なっていることから、研究者の注意を引きつ

けやすかったのである。概して言えば、現在までの關連する研究は、主に以下のいくつかの方面に分けられる。

まず初期の衛生學の著作にみられる、衛生という言葉の歴史的由來をたどる論述が擧げられる。これらの研究は、近代的衛生概念は日本からもたらされたと考えるのが一般的であったが、その中でも陳方之の研究は最も代表的なものである。彼は「こんにちのいわゆる衛生とは、決してわが國の言葉に由來するものではなく」日本語の用法を襲用したものであり、日本人が「衛生」をHygieneの譯語にあてたのは全く妥當性を缺いているので、近代衛生を文字通りの意味で理解してはならないと注意を促した(1)。

次に擧げられるのは、新名詞研究における關連の研究である。最も早いものとしては、彭文祖が一九一五年に出版した『盲人瞎馬之新名詞』の中の「衛生」という一節が擧げられよう。彼は日本語に源を發する新名詞に對して、おしなべて嚴しい批判を浴びせているにもかかわらず、「衛生」という言葉には非難を加えず、日本語に由來する言葉かどうかを明言することもなく、「衛生とは生存・生活を守る意味で、用語字義はみな正しい(2)」と述べるのみである。現代の新名詞研究では自覺するにせよ自覺しないにせよ、衛生は日本語起源の言葉であると見なしているようである。中でも沈國威と馮天瑜の著作はこの點について記す所が多い。沈國威は近代における新語彙の生成を檢討するにあたって、古い言葉を借用して、そこに新たな意味を與えたものの一例として衛生を取り上げ、傅雲龍の『衛生說』という重要な資料を初めて紹介した(3)。近ごろ出版された馮天瑜の著作は沈國威とはねらいがやや異なり、衛生を「僑詞來歸」の例と捉えた——つまり衛生という語は近代に日本で借用され、新たな意味を與えられて中國に里歸りしてきたと考えた(4)——という點に特色があるが、それを除けば、資料の面でも論旨においても、特段目新しいところは見受けられない。

最後に、近年の衛生史研究での考察が擧げられる。劉士永は比較的に早くからこの問題について論じていたが、日本の近代醫學におけるドイツの影響を論じる中で、彼は明治七年（一八七四）ごろに長與專齋が衛生という言葉をHygieneの譯語にあてたという史實に言及している(5)。雷祥麟は民國時期の社會における「衛生」という言葉の使用と衛生認識の複雜

性を論じ、當時の中國には當局が標準とする衞生概念と規範が存在しただけでなく、「治心」のような個人の心身の調節を強調する言葉に代表されるように、數多くの異なる衞生認識が同時に存在したとする。(6) 以上のような研究は衞生概念の變遷について專門に議論しているわけではないが、それと比較すると、ルース・ロガスキの近著はこの問題を扱った專論であり、最も的を射ており、問題を餘すところ無く捉えていることは間違いない。彼女は天津の近代衞生機構の創設を描き出すことを主な目的としていたが、それだけでなく語句の變容を手がかりに衞生觀念と行爲の變動を考察することにも、大變注意を拂っている。彼女の論旨をまとめると以下のようになる。一九世紀末期以前には、中國語には衞生に關わる多くの概念をひとつに結びつけるような特別な術語は存在せず、帝國主義ヨーロッパおよび日本の健康衞生觀念の傳來が現代の衞生という術語の成立を導いた。そして一九世紀末期になると、新しい意味での衞生はすでに中國に出現していた。(7) この研究は、中國近代における「衞生」概念形成の背後には實は大變複雜な關連語彙の來源があることを明らかにした、大變見識あるものである。しかし、中國人の手になる大量の漢文文獻を充分には把握しきれていなかったため、歐米の論著によってもたらされた「衞生」の新たな意味を外側から眺めるにとどまり、中國語そのものに立脚して「衞生」概念の變動がたどった軌跡を示すことができなかったのである。

以上の先行研究からわかる事實は、次の二點に要約される。第一に、東アジア世界における近代的な意味での「衞生」という言葉はまず明治初頭の日本に現れた。第二に、遲くとも清朝の最末期までには、中國語における「衞生」は既に日本語の「衞生」と合流していた。それでは、「衞生」という中國語の清末における變化とは、日本語から取り入れられた「衞生」の語が、もともと存在した「衞生」の語にとってかわったに過ぎないのか。もしそうでないとすれば、その具體的な過程とはいったいどのようなものであったのか。本稿では先行研究を踏まえながら、可能なかぎり幅廣く關連文獻を整理することを通してこの過程を描き出すとともに、この考察を通じて中國における近代化の複雜な様相の一端をかいま見ることにしたい。

一　「衛生」の傳統的概念と近代的概念

「衛生」は現代生活と密接にかかわる常用語であるとともに、かなり昔から使われていた語句でもあり、先秦時代の典籍である『莊子』には既にあらわれていた。[8] 最新版の『漢語大詞典』は、衛生という言葉には「①養生、つまり生命を保護すること。②生存しようと圖る。③人民の生命を守る。④病氣を防ぐことができ、健康に有益である。[9]」という四つの意味が含まれることを指摘している。こういった解釋は、「衛生」という言葉が昔から今に至るまで包含してきた意味を一般的に理解するには十分なものであるが、この語句を用いる場面や文脈、また過去と現在とにおけるこの言葉の用法や意味などの違いを見極めることはできない。ゆえに、できる限り具體的な文脈の中から、この問題について考察することにしよう。

近代以前にも「衛生」という言葉が使われることはあったが、常用語であったとは到底言い難い。『四庫全書』のデータベースを檢索してみたところ、衛生という語は合計で六五七回あらわれるが、これは意味の近い言葉である「養生」のほぼ十分の一でしかない。しかも、ひとつひとつの用例を調べてみると、そのうちの四割ほどが、實は「衛生」という語句として使われているとはみなせず、[10] それ以外についてもこの言葉があらわれるのは醫書や個人の文集の中においてであり、しかもその半分近くが『衛生家寶方』のような書名の一部として現れることがわかる。また、二十五史のデータベースを檢索してみると、「衛生」は一四回あらわれ、うち四回は實際には「衛生」とは關係が無く、のこりの一〇回のうち七回は書名に使われている。さらに四大小説、三言二拍などを含む二〇篇近い明清小説[11]を檢索してみると、「衛生」という言葉はどこにも使われてはいなかった。

「衛生」は文字どおり解釋すれば、「生命を衛る」ことであるが、概念の外延は甚だ廣範にわたり、およそ生命を守り身體が傷つくことから逃れるための行爲、例えば養生して醫者にかかる、災害を防ぐ、暴動を鎭める、などといった行爲

はいずれもここに含まれることになる。古典にも、時として衛生という言葉を次のように比較的廣い意味で使用している例が見受けられる。

陳平がひそかに漢王に歸服して災禍を免れ、臨機應變に對應することで苦境を乗り越えたことについては、みな生命を衛り（衛生）災いから逃れるためであって、榮譽のためではない。(12)

しかし全體的にみて、この言葉はやはり身體の健康と關わる場合に用いられることが多い。中でも最も典型的なのが先程引用した『莊子』の「衛生之經」という用法であり、ここでは「養生」を意味する。このほか、衛生は醫學書の書名に比較的多くあらわれ、中には、『孫思邈衛生歌』のように養生を專門に論じた著作に使われることもあるが、『衛生寶鑑』『衛生易簡方』『衛生鴻寶』といった普通の醫學書の書名に使われることの方が多い。これらの書物の序文や目次を見てみると、必ずしも養生にのみ關心を拂っているのではなく、多くは內科、外科、眼科、喉科をはじめとする各科の疾病を治療することにねらいがあり、基本的に一般的な醫方書と何ら異なるところはないということがわかる。これは、古人の概念の中では「衛生」が意味の上で「醫」とそれなりに通じていたことを表している。この點は、以下のような表現からよりはっきりと見て取ることができる。

醫學は三皇に始まる。周になると六官に醫師を設け、醫の政令を掌ることで民の生命を衛った（衛民之生）。(13)

醫は人の生命を衛る（衛人之生）ことができる。ゆえに天下には醫がなくてはならないのである。(14)

醫が「衛人之生」の術であるからには、醫術を「衛生術」と呼ぶのは當然ながら何の不都合もない。それゆえ「衛生」は養生を指すだけでなく、「思うに、人がたいへん重んじるものは生命であり、生命を衛る（衛生）よりどころとして極めて重要なものは藥である」(15)とあるように、時には醫療をも指した。しかし、實際の用例をみてみると、衛生という言葉は生命の養護と醫療という二つの意味を同時に含むことはほとんどないようで、例えば次の例では、衛生は「醫療」の意味を含んでおらず、さらには、醫療と對になっていることも指摘しなければならない。

伏して思うに、私の妻である宜人沈氏は最近衛生の理に背くことがあり、七男を身籠もったまま病に罹ってしまった。巫醫が相次いでやってきたが、いずれも藥石のききめはなかった。(16)

以上からわかるように、衛生は文字の上では幅廣い事象を指し示すことができる言葉であるが、實際にはおよそ身體の健康とかかわる文脈で用いられることが大半で、その意味するところは「生命」に對する養護と醫療である。様々な狀況下においてここの「生命」を「身體」と言い換えることもできないわけではない。しかしながら、傳統的な衛生が人間の物質的な身體の養護と醫療を意味するだけでなく、身體に附隨するが身體とは區別される精神と氣（いわゆる「養心」「養氣」など）に對する保護を含むことに注意しなければならない。様々な文脈の中で、衛生は「養」を指すこともできれば、また「醫」を指すこともできるが、どうやら同一の場面で同時に兩方の意味を指すことはめったにないようである。どちらかというと「養護」の意味を指し示す場合が多い。よって、傳統においては衛生は「養生」とかなり一致する語句であるが、その意味するところはさらに廣範にわたり、かなりの包容性と能動性をも備えている、ということができる。

一方で近代的な意味での衛生概念については民國初期に出版された『辭源』に比較的わかりやすい解說がある。

衛生　『莊子』に「南榮趎曰く、願わくば衛生之經を聞かんのみ。」とあり、謝靈運の詩に「衛生自有經。」とある。衛生學の項目を參照。

衛生學　Hygienics　人類の生理機能を研究し、身體の健康を增進させる方法を圖るもの。生理學と醫學を縱糸とし、物理學、化學、細菌學を横糸として、利益を追求し災いを避ける方法を深く研究する。その範圍は個人衛生、公衆衛生の二種類に大別することができる。(17)

ここで言う衛生學とは、近代的衛生概念についての解說とみることができる。この解說や民國期の著名な醫學者かつ衛生學者である陳方之による專門家の觀點からの解說(18)、および現代中國語の日常的用法から考えると、近代の「衛生」概念の特徵やその傳統的な用法との差異を以下の數點にまとめることができる。まず近代の「衛生」は身體の健康と關わる文

脈に限って使用されるようになり、疫病ではなく健康に重點が置かれたことによって狹義の「衞生」概念から「醫療」という含意は驅逐されてしまった。その一方で衞生行政が醫療行政の管理を含んでいるので、廣義には醫療もなお「衞生」という言葉の中に含めることができるが、ただ醫療そのものではなく醫療活動を管理する行爲を指すに過ぎない。よって、醫療となお相互に關係するにもかかわらず、傳統的な「衞生」のように醫療との境界が曖昧なものではなく明確に區別される。次に、衞生はすでに個人が靜心や節欲といった方法を通じて身體を守る個人の保養行爲にとどまらず、近代の實驗科學を基礎とする、より健康に適した生活方式と環境を追求する專門的な學問となった。さらに、衞生も最早單なる個人の私事ではなく、社會ないしは民族國家に關わる公共事業となり、社會と國家の力を借りて行うことが必要となった。最後に、傳統的な衞生における生命の養護とは異なり、近代の衞生は、科學知識と社會と國家の力を利用しながら、外在する生存環境を改善し人間の健康に對する欲求に適合させることを極めて能動的に主張する。言い換えれば、傳統的な「衞生」と比べて近代の衞生概念はより外向性、能動性、社會性、そして科學性を備えているのである。とりわけ近代衞生が、外在する環境の健康に對する重要性を強調したことから、清潔と健康の關係はもっとも容易に理解される所であった。ゆえに、衞生と清潔の密接な關係もごく自然に形成されたのである。また、概念の使用の面では「衞生」はもはや動詞「衞」と目的語「生」の組み合わせからなる名詞ではなくなり、「疾病を防ぎ、健康に益ある」狀況をあらわす抽象名詞（「講衞生」「注意衞生」）としてのみならず、同じような特徴を示す形容詞（「不衞生」「衞生習慣」）としても用いることができるようになったのである。

二　「衛生」概念の變動の始まり（光緒初年―一八九四年）

1　近代日本における「衛生」の形成とその中國に對する初期の影響

近代的な意味の「衛生」がまず日本に出現したことは、全く疑問の餘地のない事實である。この點については、日本における近代以來の數多くの論著は、その功績を明治期日本の衛生事業の創始者である長與專齋に歸すという點でいずれも一致した見解を示している。[19] このことについては長與の『松香私志』により具體的な説明がみられる。彼は明治政府の官僚として、明治四年（一八七一）から六年までの岩倉具視使節團の歐米視察に隨行した。その視察の過程で彼の關心と興味を特に引きつけたのが、歐米特にドイツの衛生制度であった。彼は「國民一般の健康保護に責任を負う」この全く新しい事業の重要性を認識し始めたのである。視察から歸國した後、彼は明治六年（一八七三）に文部省醫務局局長に就任、翌年には醫務局は文部省から内務省に移管された。長與はこの醫務局という名稱が實際の機能とかならずしも一致しないと感じて、改名しようと考えた。この時彼は折しも醫師制度を策定している最中で、ある日 Hygiene という單語を翻譯しようとした際、たまたま『莊子』中に「衛生」という言葉があることを思い出し、意味が比較的近いうえ見た目にも格調高かったことから、これを部局の名前とすることに決めた。衛生局の名はこのようにして定められたのである。その後、時が經つにつれ衛生は日本では廣範に受け入れられた通用語となり、近代衛生事業も著しい進歩を遂げた。[20] この過程において、衛生という言葉の概念が變化したのは言うまでもないことだが、更に重要なのは國家および社會全體の衛生行爲と制度にも變化をもたらしたということである。衛生と健康の問題はすでに個人の生理機能にかかわる私事から、政府の施政における重要な事業となったのである。[21]

しかし、このことがただちに中國社會に影響を與えたわけでは決してない。光緒以前には、中國社會の日本理解はわず

かなものでしかなかったが、光緒初年以降には、次第に官僚や文人が日本に來るようになり、東遊日記のような書物がいくつか出版されるようになる。これらの旅行記を見ると、日本の家屋が清潔であることに氣づく者はいた[22]ようだが、ここから日本の近代衛生事業の存在にまで關心を抱いた者は誰もいなかった。しかし、中國人が近代的衛生制度を含む明治新政の内容を全く知らなかったわけではない。光緒三年（一八七七）駐英公使に任ぜられていた郭嵩燾は時の駐英日本國公使上野景範から『官員名鑑』を手に入れた。郭はこれに基づいて、日記の中で日本の政府機構の設置情況をかなり詳細に列擧しており、内務省を紹介する際に、「内務省に所屬する局は一六であり、……一〇番目は衛生局である[23]」と言及している。ただし、この記述では、衛生局は數多くの行政機構のひとつでしかなく、それ以後の日記を見る限り、彼はこの機構に對して特別な關心を持っていなかったに違いない。その上、この部分の日記は當時まったく出版されていなかったので、この記述が當時の中國社會に何らかの影響を與えたとは言い難いであろう。

その後、黄遵憲は『日本國志』の中で一歩踏み込んだ記錄を殘している。この書は彼が駐日參事官であったときに著したもので、光緒八年（一八八二）に草稿が作られ、一三年（一八八七）には完成した。ただし、正式に出版されるのは光緒二一年（一八九五）以降のことであった[24]。ここでは内務省の「衛生局」と地方警察制度の衛生にかかわる機能について以下のような紹介がなされている。

衛生局は大書記官を局長とし、その職掌は人民を保護して疾病を無くすことにある。およそ街路を清掃したり、暗渠をさらったり、井戸や臺所などを清潔にしたりすることについては、みな府縣の官員および警察官に命令して、地方の民衆に不潔なものを清掃させて、疾病を防ぐ。醫師は必ず試驗を受けねばならず、免許が交付されてはじめて開業が許可される。大都市では、必ず病院を設けて病人を收容して療養させ、院長はその病狀を定期的に調査して衛生局に報告する。醫藥品を販賣する者は、必ず化學檢査を行い人體に有害でないことを確認してから發賣を許可する。人間や家畜が流行病に感染した場合は、必ず地方の警察所から衛生局に速やかに電報し、豫防の手だてを講じる[25]。

また、警察の職掌に言及して、これを「一去害、二衞生、三檢非違、四索罪犯」と述べている。(26)

こういった解説は、すでに衞生の名のもとに、近代的衞生、とくに國家による衞生制度の基本的な内容をおおよそ含んでいると言うべきである。しかし、この限られた量の記述では『日本國志』という浩瀚な書物の中に埋没してしまって、讀者の注意を引きつけることははなはだ難しく、そもそも作者はこの部分に重點を置いていたわけでもなかったはずである。さらに言えば、この『日本國志』の出版はやや遅かったので、彼のこの紹介が日清戰争以前に中國に與えた影響はごくわずかなものでしかなかったのである。

光緒一三年（一八八七）には傅雲龍が日本視察に派遣され、その年の一〇月二九日に内務省衞生局を訪問した。當時局長であった長與專齋は衞生局の名稱が實際にかなっていないのではないかと心配して、雲龍に「衞生という名稱は合っているのかどうか」再三問いかけた。そこで、雲龍は『衞生說』を著し、古典を引用しながら長與への支持を表明した。

衞と醫とはどちらも生命を全うする方法だが意味は同じではない。醫は常に病を得た後に施されるのに對して、衞は病を得る前に講じられる。……『說文解字』によれば、衞とは宿衞であり、韋と帀に從い、行に從う。行とは守ることであり、帀は周の意味であるという。『史記』では衞令を周廬というが、それはこのことに據っている。したがって衞生という語は内をまもる意味があり、外を防衞する意味がある。生命によいものがときに外に逃げたり、また生命を害するものが隙につけ込んで中に入ったりしないようにする。汚れは清潔の仇であり、汚れを取り除くことはすなわち清潔を守ることである。贋は眞の敵であり、贋を辨別することはすなわち眞をまもることである。過ぎたるも及ばざるも中〔庸〕に對する弊である。過ぎたるを退け、及ばざるを進めることは、すなわち中〔庸〕を守ることである。〔淸〕潔、眞〔實〕、中〔庸〕はみな生命のよりどころである。「醫」だけで言い盡くせるものだろうか。あるいは何故「養」と言わないのかと疑問を持つかもしれない。「養」は言いにくいからである。心と氣を用いれば「養」といい、自然の道理である。力や物質を使えば「衞」といい、人爲的な努力である。ここにいう人爲的な努力は、自

然の道理と矛盾するものではないが、學問の術語としては聲高に「養」という必要はない。「衛生」と命名するのを、だれが不適當だと言うだろうか。(27)

管見の限り、これは、中國の知識人が專ら近代的な意味での「衛生」について議論した初めての例である。沈國威によれば、傅雲龍は「衛生と命名するのを、だれが不適當だと言うだろうか」と太鼓判を押したが、これは同時に傅雲龍自身が西洋の新概念を獲得した「衛生」という語を受け入れた過程とも言える、という。しかし、沈はまた「衛生は中、潔、眞等の生命の基本を獲る云々の意味推論、演繹は牽強附會の感を免れない」とも評している。(28) 傅雲龍が當時このような解説をしたのは、本心からそう感じていたからなのか、それとも、長與の善良な期待に答えるために行ったのかは、にわかに結論づけがたいのは確かである。ただし、こじつけであったかどうかはともかく、少なくとも傳統から近代にかけて「衛生」が語義の上で繋がっていた點をみつけることは可能であり、そして古典の中から根據をみつけることも容易であった事實をこの解説は示してくれている。言うまでもなく、傅雲龍が衛生局を見學しているあいだに、長與はきっと彼に當時の日本の衛生および衛生局に關係する様々な知識を紹介したであろうから、ここから日本の近代衛生概念と衛生制度が中國の使節に與えた確かな影響をはっきりと見て取ることができる。とはいえ、傅雲龍が光緒一五年（一八八九）に總理衙門に提出したこの著作はすぐに公刊されたわけではなく、實學齋によって全書が公刊されたのは二〇世紀に入ってからのことであった。(29) そのため、當時の中國社會への影響力について高い評價を與えることは難しい。

以上のことから、日本は明治の初年にいちはやくHygieneに對應する「衛生」という言葉を使用し、それにふさわしい國家の衛生制度を創設し、光緒初年以降にこのことが中國の一部の知識人や官僚に大なり小なり影響を與えるようになったものの、中國社會全體に關して言えば、その影響はまだ微々たるものでしかなかったことがわかる。

2　西洋衛生知識の流入と「衛生」概念の潜在的變化

日本とは異なり、中國には長與專齋のように積極的・主體的な態度で西洋の衛生觀念と制度に注目し、吸收しようとした人物は現れなかった。さらには、かなりのあいだ日本のこうした努力がはっきりとした有效な影響を中國社會に與えることもできなかった。しかしながら、少なくとも光緒初年以降、歐米の近代衛生觀念と知識が絶え間なく中國に入ってくるのに伴い、「衛生」という中國語もひそかに變化しはじめていた。

衛生は近代で最初の華英字典である『五車韻府』の中に昔からあった語句として既に收錄されており、“to take care of one's health and life”と譯されていた。[30] これはひとまず衛生という言葉の字面から譯したものである。その後、同治末年に刊行された『漢英韻府』にも「衛生」の語は收錄されているが、同じ項目において「衛身」という語句がorでつなげて補足されており、そして“to take care of one's health”と翻譯されlifeが創られている。そのほかに、「衛生丸」という項目が追加されており、“life preserving pills”[31]と譯されている。わずかこれだけの變化からでは、當時の「衛生」が近代性を有していたと認めることはできない。しかし「衛身」と同列に論じ、しかも身體の健康にかかわる意味だけを取り上げたことは、少なくとも將來人々が近代衛生を指す言葉としてこの「衛生」を選ぶようになるより高い可能性を提供したといえよう。

英語のHealth、Hygiene、Sanitaryといった衛生と關連する語彙はみな身體の健康にかかわるものであり、おそらく中國語の「衛生」が對象とするのは生命であり指し示すところが廣範にわたりすぎるところから、初期の漢英字典ではHygieneの譯語として「保身」という言葉を用いることが比較的多かった。ロプシャイトが同治五年に最初に刊行した著名な『英華字典』では、關連する言葉について以下のような解釋を施している。

Hygeia, n. the goddess of health, 保身神名。

Hygeian art, 保身之理、保身之法。
Sanitary, a. 保安的、sanitary rules, 保安例、防恙規例。(32)

「保身」という譯し方は、日清戰爭に至るまで大きく變化することはなかったようである。この言葉は當時の譯書にしばしば見られる。たとえば、次のような例がある。

知識のある者が、保身に愼重に對處して病を未然に防ぐことができれば、長生きすることができるだろう。(33)

また、ジョン・フライヤーが口譯した『儒門醫學』（一八七六年）の第一部分である「養身の理を論ず」では西洋の衛生學説を紹介しており、標題こそ「養身」という言葉を用いてはいるが、文中では再三「保身」という言葉が使われている。一例を擧げよう。

この本は保身の方法について論じるので、人の生命にかかわる重要な事柄を簡單に説明しなければならない。それは、一に光、二に熱、三に空氣、四に水、五に飲食である。保身の方法は、この五つと關連しており、五つのうち一つでも缺けてしまってはならないし、どの一つが特に重要であるとも言い難い。(34)

また、該書の附卷中の「愼疾要言」でも、衛生について述べている。(35) このことから、當時の衛生に關する記述には「保身」が常用されるほか、「養身」「愼疾」といった言い方もあった、ということが分かる。このほか、光緒五年（一八七九）にドイツ人のエルンスト・ファーバー［Ernst Faber］によって連載・出版が始まった『自東徂西』が「善治疾病」と稱して近代の衛生知識を紹介し、「潔身衣」「精飲食」「廣屋宇」「選工藝」「禁嗜欲」「防傳染」「除狼毒」「設醫院」という八つの方面から、衛生について注意すべき事柄を論じた。(36) 他にも「養生」という言葉を使用した例がある。

齊家は修身にもとづくので、家庭を治めることもまた養生の要にほかならない。……およそ住宅を建てる際には、かならず風通しを良くするべきであり、大勢の人々が集まって住んではならない。……家庭で使う水は清潔でなければならない。(37)

こういった譯書は、言葉遣いや書籍の形式と言った面で、できるかぎり傳統と接近しようとしているようであり、甚だしくは古典中の故事を引用して論據とすることさえあったが、それは中國の讀者が受け入れやすいように考慮してのものに違いない。こういった論述は「衞生」という言葉こそ用いてはいないが、そこで紹介しているのはあきらかに西洋の近代衞生學に屬する知識であり、傳統的な「保身」「養生」といった言葉の持つ意味とは異なるところがあるのは明らかである。たとえば、清潔を強調することや良い居住環境を作り上げること、化學や生物學といった近代科學の知識をもって指導をしたりそれを基礎としたりすることなどである。

もちろん、「衞生」という言葉で西洋の衞生知識を紹介するものも存在した。ロガスキはその著書のなかで、ジョン・フライヤーとその協力者が『化學衞生論』を翻譯出版したことを明治の醫學エリートが新しい衞生を作り出したことと同列に論じ、譯書の出現は「衞生の意味が中國で變化し始めたことを象徵」していると見なした。彼女は、これらの譯書は西洋の近代衞生知識を紹介したものの、衞生が西洋の近代的實驗科學を據り所とする行爲や學問であるということに記述の重點がおかれ、それが政府、警察、そして民衆と結びつくものであるという近代的觀念にまではほとんど注意が及んでいないと見なしている[38]。一九世紀末期の中國における「衞生」概念の近代的變動と日本の新しい「衞生」の形成とは、實はそれぞれが別々に西洋からの影響を受けて生じたものである、という彼女の考えは大變説得力がある。しかし、冒頭でも述べたとおり彼女が資料を十分に把握しきれていないためか、その論述には、補充・考察すべきところが殘されているようだ。

現在までのところ『化學衞生論』は「衞生」の名を冠し、近代衞生とも密接に關係した最初の著作であることは間違いない。この本が正式に出版されたのは光緒七年（一八八一）正月のことであるが、實際には光緒五年の夏から翻譯が始められており[39]、翌年の正月から出版され始めた『格致彙編』に連載されていた。もとより、この事實をもって中國近代の「衞生」概念の變動のはじまりであると見なすこともできるが、冷靜に考えれば、この本は嚴密な意味での近代衞生學の著作

であるとみなすことは不可能なようであり、その英文の原題 *The Chemistry of Common Life* には衛生の意味は全く含まれていない。ここで述べられているのは、日常生活中の化學現象やそれに關連する化學知識であり、空氣・飲料水・土壤・穀物・肉・酒・茶・煙草・アヘンから工業發展が引き起こす環境汚染と言った問題にまで議論が及んでいる。[40] 譯者であるフライヤーと琴隱詞人が衛生という言葉を採用したのは、Hygiene あるいは Sanitary という言葉の譯語として用いる意識からでは全くなく、この言葉で西洋の近代衛生事業を指し示すことまではおそらく考えていなかったであろう。[41] むしろ、ここで紹介されている最も身近な化學知識が「生生之道」を會得するためにきわめて重要であり、そのため「生命を守る」ことに役立つと考えて、衛生という言葉を使ったのである。實のところ、彼らのこの翻譯では傳統的な意味で「衛生」という言葉を用いていることの方が多いのである。とはいえ、この本は多少ならずとも西洋の近代衛生學と關係していたので、この譯し方が現れたことによって、傳統的な衛生概念の含意が豐富なものとなっただけでなく、彼らが後に衛生という言葉を用いて本來の衛生學の著書を翻譯する際に大いに貢獻することになる。その後フライヤーは、『居宅衛生論』（*Sanitary Engineering to Cure the Poor*, 1980）、『孩童衛生編』（*Health for Little Folks*, 1893）、『幼童衛生編』（*Lessons in Hygiene*, 1894）そして『初學衛生編』（*First Book in Physiology and Hygiene*, 1895）といった、衛生という言葉を題名に含む一連の西洋衛生學の著述を翻譯出版したのである。[42]

當時、衛生という言葉を用いて西洋の近代衛生に關する知識を紹介したのは、實はフライヤーの翻譯した一連の衛生學の著作に限らなかった。光緒八年（一八八二）顏永京の翻譯により、近代教育を論じたH・スペンサーの『肄業要覽』が出版されたが、そのうちの第四部分は「衛生」となっており、現代教育の觀點から衛生教育の問題を論じている。例えば、このような記述がみられる。

〔衛生とはつまり〕生命を保護することである。……人はまず身體安和の理を知らねばならず、その上でようやく〔その理を〕遵守することができる。そこで教師たる者はまず身體安和の知識を教えて、生徒達にいかに行動すべき

か理解させなければならない。[43]

ここに言う衛生とは、主に「身體安和の學問」を指してはいるが、實はまさしく近代衛生學の範疇に屬している。そして、さらに注意しなければならない譯書がある。それは、光緒八年（一八八二）にジョン・グラスゴー・カー［John Glasgow Kerr］によって譯され、翌年廣州で出版された『衛生要旨』である。この書は基本的に近代衛生學の著作であると見なすことができ、一般的な日常衛生に關する知識を紹介するだけでなく、國家と社會が衛生問題に責任をもつことについてとりわけ紙幅を割いている。凡例では、西洋國家の醫師の評價制度が紹介されており、「だれでも醫者になることができる」中國も「このように醫師を試驗によって採用することで、國家が軍民を保護して、ともに仁壽にのぼるのを助ける」[44]という希望を述べている。この書が國家による衛生行政の一端まで説き及んでいることは明らかである。それだけでなく、この本は傳統的な「修身、齊家、治國、平天下」の思想に基づいて、衛生問題を個人の私事から社會と國家の重要な任務へと擴大したのである。以下に例を擧げよう。

「論整飭全家」　齊家は修身にもとづくので、家庭を治めることもまた養生の要にほかならない。……

「論推愛鄉邑」　鄉邑を推愛する方法もまた身近なものから遠くのものへ及ぼし、自分を推し廣めて他人にまで及ぼすということに盡きる。たまった汚物を清掃して外觀を整え、毒氣に感染する事態を免れることが第一である。病氣に罹った豚や牛の肉を販賣することを禁じ、眞劍に取り締まってきびしく處罰を加え、病氣を引き起こさないようにすることが第二である。山泉を引いてきて飲用や洗濯用として用いることで、井戸水が鹽辛く不純物が混じるという弊害を避けることが第三である。病院を設けて鄉民の生命を重んじることが第四である。糞尿を清掃して病毒を取り除き、傳染病の發生を免れることが第五である。有司が鄉正や保正に責任を負わせるのが第六である。……

「論爲國培元」　外國船の停泊が集中するところで最も重要なのが檢疫である。入港している船の中でひとたび病氣が發見された場合、それが廣まれば必ずや大災害となるであろうし、その防疫に必要な措置は鄉邑の紳宦では處理で

きるものではない。[45]

このような事例から、少なくとも中國全體の情況としては、當時西洋の近代衞生知識を導入する際には、ロガスキが指摘する「政府・法律・民族・そして集團行動を輕視した」[46]という問題は存在していないと言える。實際、フライヤーの衞生に關する一連の譯書においても、『居宅衞生論』などは實は社會と國家の責任を非常に強調しており、むすびのところにはこのように書き記されている。

故にそれぞれの國家は民衆の苦しみに關心を寄せ、人員を配置して各都市の衞生事業を管理しなければならない。……衞生の道は、普遍的に通用することであり、西洋の國々では多方面にわたって研究し、できる限り完全であることを望んでいるのに、中華がどうしてそれを輕視して、全く關心を寄せずにいられようか。[47]

ロガスキも勿論この點には氣づいていたのだが、彼女はこの書が當時はそれほど重視されていなかったので、この考えが與えた影響はごく限られたものであると見なした。しかしながら、それは實のところ誤解なのである。彼女は、この本の內容は『格致彙編』上に掲載されただけでまだ單行本としては出されていなかったことをその主な理由としているが[48]、實際には『格致彙編』に發表されたまさにその年に單行本が出版されている。まして、『格致彙編』での發表そのものの影響も決して小さいものではなかった。たとえば、孫寶瑄の光緒二三年（一八九七）一〇月の日記に「夜、心を落ち着かせて『居宅衞生論』を讀む」という記述がある。[49]『格致新報』に掲載されたある問答にも、質問者が「以前『居宅衞生論』を讀んだ」と述べている部分がある。[50]つまるところ、問題は當時中國に紹介された近代の衞生概念が完全ではなかったことではなく、中國社會がこういった紹介に對して主體的な關心を示さなかったことにあるのである。

光緒初年にあっては、人々は近代衞生概念を表現する際に「保身」「養身」という言葉を用いることの方が多かった。しかし、『化學衞生論』と『衞生要旨』といった書籍の出版發行にともない「衞生」の語で近代衞生を言い表すことが目に見えて增加していた。このことは、少なくとも以下の二つの方面から窺うことができるだろう。

まず、初期の『化學衞生論』や『衞生要旨』といった書籍は、「衞生」を書名に用いてはいるものの、本文中で衞生という言葉が使われることはほとんどなかった。しかし、後にフライヤーが譯した衞生關連の著作においては、この言葉が頻繁に使われるようになった。しかもこれらの書物における衞生という言葉の使い方は今日のものとほとんど變わるところがなかった。たとえば、次のような例を擧げることができる。

もし一部の個人だけでなく、誰もが衞生の重要性を理解し、一時的ではなく年を經るごとにますますこの書が流行したならば、この法律を作成してそれを推し廣めた人の、子供達に對する功績がわずかなものであるはずがない。(51)

およそ人家の密集しているところでは、毎日排出される屎尿やゴミは大量に上り、もし何らかの方法でこれを取り除かなければ、必ず街路を汚し民衆の健康を害することになり、衞生の原則が損なわれることになる。(52)

つぎに、「衞生」という言葉がその他の譯書の中にも多くあらわれるようになった。たとえば、光緒一七年（一八九一）に『格致彙編』上に發表された「醫理述略」（尹端模筆譯、ジョン・グラスゴー・カー校訂）では様々な場面で「衞生」という言葉が用いられている。例を擧げよう。

ひとつは免病の法である。人を健康に保つ學問や技術を衞生という。そして衞生の原理は、明らかに體用の學を確かに理解することにもとづくのであり……。(53)

ここから、當時の「衞生」概念は近代的な特性をひととおり備えていたと言えそうである。しかし、指摘せねばならないのは、こういった「衞生」という言葉が用いられるのはまだ關連する譯書のなかに限られており、中國人の著作の中にはほとんど見られなかったということである。例えば、上海などの開港場では、日々惡化する環境問題や、西洋の衞生知識の導入といったさまざまな要因から、衞生に關する問題（例えば、清潔な水源や上水道、都市の道路の清潔と、汚物の處理など）についての議論が增え始めていた。(54) しかし、その當時の議論においては「衞生」の語はまったく現れていなかった。この點を比較的明示している例を擧げてみよう。清末の上海の著名な鄉賢である李平書は光緒年間に上海の水道事業の建

設に盡力していたが、晩年に回顧錄の中で當時の上海は「外堀は詰まり海水は汚れて濁っており、衛生に害がある」狀況であったと述べている。[55] しかし、彼が水道事業に盡力した當時書き表した文章にはただ「臭氣が直接當たると、とりわけ病氣を招きやすい」もしくは「外堀の水が汚れていて、これを飲むと病氣になりやすい」とあるだけで、[56] このことと「衛生」を全く結びつけていないのである。

しかし、當時の洋務派の重要人物である鄭觀應の場合はやや例外である。彼は廣東香山に生まれ、幼い頃から西洋の學問に接する機會が比較的多く、西洋の衛生關係の知識についても多少の理解があった。光緒一六年（一八九〇）に鄉里で療養しているあいだに著した『中外衛生要旨』は、主要な部分から見れば基本的に傳統的な養生學の著作と見なすことができ、[57] 道敎による養生の色彩が濃厚なものになっている。しかし、西洋の衛生知識をも少なからず紹介しており、うち卷四では、「泰西衛生要旨」について專ら論じている。

西洋の科學は日々進歩しており、西洋の醫學はそういった科學的方法に基づいて人體の組織を調べて、體が硬くなり動きにくくなるといった様々な老化現象は、みな土壤に含まれる鹽類が人體にたまることが原因であると詳しく論じた。……私は采錄して養生する者の參考とする。[58]

こういった西洋の衛生知識は個人の衛生の範疇に屬しており、養生との關係が密接ではあるものの、近代化學や生物學といった科學知識に依據している部分が大きい。あきらかに、この著作は無自覺のうちに傳統的衛生の意味を豐かにしていたのである。また彼は光緒一〇年（一八八四）頃に書いた『勸廣州城廂內外街道糞草穢物公啓』の中で衛生という言葉を用いていることも指摘しておかねばなるまい。

毎年夏から秋への變わり目に、奇病や暴疫が流行して災害となりますが、これは全てが季節の變わり目による一時的な流行というわけではなく、地方の不潔さに起因するところでもあります。……しかしながら、地方の不潔は固より地方の災いとなりうるものであり、實際當地の人士も責任を負うべきものでもあります。今もし當地の官員がこの提

唱を行い、衛生の要旨を説明し、南海・番禺兩縣〔の知縣〕および各段の保甲・巡緝委員に命令を下し、各街坊の董事や地保らに嚴命して各街にたまったゴミを一律に清掃させることとし……。(59)

ここでは衛生を街路の清掃のような近代の衛生にかかわる作業と直接結びつけており、地方當局の責任を強調してもいる。「衛生」が傳統から近代へと向かっていることは間違いない。しかし、鄭觀應がこのように「衛生」を使用しているのは、彼が當時ちょうど『中外衛生要旨』という書物を編纂していたことと明らかに關係があって、單なる偶然に過ぎないようだ。實際、それ以降に出版した『盛世危言』では醫師の試驗制度や道路の清掃といった衛生事業について繰り返し論じているにもかかわらず、「衛生」という言葉は一度も使っていないのである。(60)

以上に述べたことからすると、『化學衛生論』の出現を長與專齋が衛生を Hygiene の譯語にあてたことと同列に論ずることができないわけではない。しかし、その理念の面から言えば、長與專齋の行爲が傳統との斷絶を體現する側面が強いとすれば、フライヤーと琴隱詞人が「衛生」という譯語を使用したことは、むしろ傳統との連續を反映する面が大きいのだと言えよう。

三　「衛生」概念の變動の進展（一八九四―一九〇五）

日清戰爭の敗北によって、中國社會の日本に對する見方は變化を餘儀なくされ始め、日本が中國社會に與える影響は目に見えて強まった。衛生行政も日本の明治維新以來の新政を形成する重要な一部分として自然と注目を集め、より大きな影響を與えるようになった。同時に、日々深刻さを增す民族的危機に驅り立てられる中、中國社會が近代衛生知識と制度を吸收して、「衛生」概念を使用する姿勢も日を追うごとに能動的になった。一部のエリート達は、中國の衛生狀態の不良に氣づき、西洋の近代「科學」的衛生の優越性、および社會と國家が衛生事業に介入し國家的衛生制度を創設する必要性を次第に認識し、西洋と日本に學ぶことを通じて中國の衛生狀況を改善することで「強國保種」の達成を望んだのであ

る。[61] こういった變化は、少なくとも以下の二つの方向から衛生概念の內包と使用に影響を與えた。まず、日本の影響が強まったことで中國人が日本の衛生制度についてより多く注意を向けるようになった。そして日本語の多くの概念が直接漢字を使って表されており、わざわざ翻譯する必要がなかったため、「衛生」という言葉を用いる機會は自然と增加した。次に、中國社會の近代衛生に對する姿勢が日々積極的になったことにより、西洋と日本の衛生に關する情報がますます中國にもたらされ（必ずしもそれは「衛生」という名の下になされたわけではないが）それによって衛生の內涵はより豐富になった。そればかりでなく、より多くの中國人が「衛生」という語に注意を拂うようになり、部分的もしくは完全に近代的な意味で「衛生」という概念を使用する契機となったのである。

當然ながら、いかなる事物の變化も全て段階を踏む必要がある。日淸戰爭以降、「衛生」概念の變容は加速し深まっていったが、ただちに近代衛生事業をあらわす統一した規範となる術語となったわけではなかった。「保身」「保生」「養生」といった「衛生」以外の表現も依然として存在しており、[62] とくに「保身」は依然として近代衛生を表す際の定番であった。この時期に增訂出版されたロプシャイトの英漢字典では Hygeian art の譯語自體には全く變化はなかったが、Hygiene という項目が追加され、「保身學」の譯があてられていた。[63] しかし、それでも增訂本からは「衛生」という言葉の使用が日增しに增加している影響が具體的にみてとれる。一八九七年と一九〇三年の增訂版の Sanitary に關する項目を見てみよう。ここでの語釋には、ともに「衛生」という言葉があらわれる。

Sanitary a. 衛生的、sanitary rules, 衛生例、防恙規例。[64]
Sanitation n. 衛生學。[65]

ともかく、「衛生」という言葉の使用が日に日に增加したことと、この言葉が近代衛生について述べる際に使われる優先順位が絕え間なく高まっていったことは爭えない事實である。このことは、淸代の各種の「經世文編」の檢索からも說明することができる。臺灣中央研究院瀚典資料庫に收錄される十種類の經世文編を檢索してみたところ、光緒二三年（一

八九七）以前に出版された四種の經世文編には「衞生」の語が使われている例はひとつもないが、光緒二四年から二八年に編纂された六種の經世文編にはあわせて五七編の文章の中に一回ないしは數回「衞生」の語が用いられていた。

また、孫寶瑄の日記からもその一斑を見て取ることができる。孫寶瑄は杭州の有名な官家大族の出身であるが、かつて長期間上海に滞在していたこともあり、新學に比較的關心を持っていた[66]。彼の日記は大部分が戰亂によって失われてしまったので、現在出版されているのは光緒一九―二〇、二三―二四、二七―二九年の日記に限られる。最初の二年間からは、近代衞生もしくは「衞生」という言葉に關するいかなる記述も見つけることはできない。二三年には二カ所で衞生に言及しており、そのうちの一回は「西人養身之學」という語を使っていて、もう一回は『居宅衞生論』を讀んだことについて述べているのだが、この本の感想を述べる際に使っているのはやはり「養生」という言葉である[67]。二七年にはあわせて三回衞生について言及しており、そのうちの一回は關連する名詞を用いてはいないが、その他の二カ所では「保衞民生」もしくは「衞生」という言葉を使っている[68]。殘りの二年間では六カ所で衞生について言及しており「衞生」は七回使用されている[69]。「衞生」の語の使用頻度が日清戰爭以後增加している傾向がかなり顯著に現れていよう。

ここで、丁福保の『衞生學問答』に言及しないわけにはいかない。この書は、光緒二五年（一八九九）に完成し、翌年刊行された[70]。これは、中國人が著したものとしては「衞生」の題名を掲げた、同時にまた近代衞生學の著作に數えられる最初の書物とみることができる。丁福保は近代の日本とゆかりの深い人物で、日本語の醫學書を數多く翻譯している[71]。しかし、この『衞生學問答』は日本とは關係なく[72]、主に『保全生命論』、『初學衞生編』といった西洋の衞生學の譯書や中國の傳統的養生書、醫學書に依據して編纂されたものである。この本は上下編に分かれ、合計九章からなる。上編七章では總論の外、全體・飲食・起居・微生物・體操・治心といった六つの方面から個人の衞生知識を紹介しており、下編の二章では、日常生活に役立つ簡單な醫學知識を中心に紹介している。「總論」において彼はまず衞生學の何たるかについて「身體保養の方法を攻究すること、これを衞生學という。」と說明しており[73]、これは、傳統的な「生命を衞る」という考

え方とは明らかに異なっている。しかし、彼の衛生に對する理解はなおも個人のレベルにとどまっており、衛生は國家と關係があることに言及してはいるものの、それは個人の身體の強弱が國家の強盛と關わることについて述べているだけで、社會と國家の衛生事業に對する責任にまでは觸れていなかった(74)。つまり、丁福保は傳統的な個人の自己調節の角度から衛生を語っているのであり、さらに醫藥治療を依然としてその中に含めていることから考えても、傳統的な色彩が濃厚であった。しかし、彼の「衛生之法」は大體において西洋近代科學に依據しており、傳統的な養生とも明らかに異なるものであった。それによって、この語に一定の近代性を附與してもいるのである。この本は、後に幾度となく再版されており、その影響はすこぶる大きかった。この本の意義は、當時の中國社會の衛生と「衛生」概念に對する認識を深めたことにあるだけではなく、さらに『保全生命論』といった論著の中に紹介される、衛生と關わるが「衛生」という言葉では表現されていなかった知識を、「衛生」の名の下に一括したことにもあるのである。

少し前の時期の、西洋衛生學の譯書中にみられた「衛生」の用い方と比べてみると、ここでの「衛生」の近代性はかなり不明瞭で傳統的な色彩が相當殘っているように思われる。この現象は當時の中國人の著述ではかなり普遍的に見られ、そこで用いられる衛生は、生命を守ることや或いは養生といった傳統的な意味で理解することができる上に、また西洋の學問とも關連してある程度の近代性も備えていたのである。

西洋には化學がある、……もし國家がこれをおしひろめ實施したならば、當然ながら兵を強くし國を富ませることができる。たとえこれを一個人が遵守するだけであったとしても、また壽命を延ばし生命を衛る（衛生）ことができる(75)。

西洋人の日常の飲食生活は、どれも盡く衛生の道理（衛生之道）に合致しており、よって病氣の發生した地方、病氣に罹った人に對して愼重に對處するだけでよい。ゆえに法令の制定は嚴しければ嚴しいほど良いのである(76)。

以上のふたつの例は、『衛生學問答』と同時期の論著から無作爲に抜き出したもので、新舊混同の特徴が比較的はっきりと現れている。そればかりではなく、當時の人々は「衛生」概念を使用する際に、その醫學との關係についてまだ明確

な認識を持っていなかったようである。例えば、『衛生學問答』では醫學は少なくとも部分的には衛生學の中に含まれていたが、以下のような言い方は、衛生の方が醫學に包含されるということを明らかに示している。

そもそも西醫の術はまた一端にとどまらない。一に衛生學、……二に全體學、……三に治病學。(77)

具體的な文脈によっては、醫學と衛生の意味するところを區別することもありうる。しかし、この例は、人々が當時基本的にはなお傳統の時期と同じように、衛生と醫學とに明確な區分を設けてはいなかったことを物語っている。

とはいえ、我々はこういった用法が出現した意義を輕視することも決してできない。なぜならそれらの用法は、もはや西洋の概念に對する受動的な對應ではなく、中國人が、西洋の近代衛生をはじめとする科學知識を消化吸收した基礎にもとづき、傳統的な概念を再利用したものだからである。

同時に、この時期の論著が「衛生」を用いる際には、以下に擧げるような重要な意義を持つ現象がみられる。第一に、「衛生」や「保身」といった言葉は、往々にして同一のテーマのもとに混同して用いられている。例えば、丁福保は「衛生學」を「保養身體之法」と説明した。『衛生說』のような專ら近代の衛生問題を議論する文章中にも「保身之法」「養生之理」といった表現を見ることができる。(78) 一方で「保身愼疾」の語が冠せられた論說中にも「衛生家」「家用衛生醫書」といった表現が使われている。(79) このことは人々が次第に衛生と保身といった語句を互いに通用するものと見なすようになっており、それによって、人々がかつて「保身」という言葉で紹介し、說明した近代衛生知識を、「衛生」の內涵のうちに注入するのに役立ったことを物語っている。第二に、「衛民生」、「保衛民生」といった表現で「衛生」を解釋したり、「衛生」を指したりすることが增え始めた。例えば、梁啓超は光緒二三年（一八九七）の文章で「もし國家が良策を講じて民衆の生命を衛り（衛民生）、醫學を解き明かして藥誤を防いだならば、それによって救われる者は毎年三・四萬人を下らない。(80)」と言及している。後には、より明確に「日本は衛生・潔淨の諸局を設けて民衆の生命を衛っている（衛民生）(81)」と述べている。同時期の「崇潔說」と題された文章では、清潔といった衛生の政策は「大きなことからみれば、これによ

って國政を見つめることができる。小さい面で言えば民衆の生命を守る（衛民生）ことができる。道理から言ってまさにこのようにあるべきなのだ。〔つまり官が管理すべきである〕[82]」と考えている。「衛民生」というこの言い方そのものはとりたてて目新しいものではなく、さきに引用した明代の楊士奇の文章中にも「衛民之生」という表現が見られた。しかし、そこでの「衛民之生」と「衛人之生」は實は人の生命を守るという意味でしかなかった。ここでの「衛民生」はそれとは異なり、往々にして國家と社會の責任を強調する際に出現し、「民」が指すのはもはや個人や抽象的な意味での人間ではなく、人民もしくは民衆のことであったのは明白である。「保衛生命」から「衛民生」へという轉換は「衛生」概念中の社會性を際だたせただけではなく、これによって人々は近代的な意味でこの概念を使用するための合理的なよりどころを見つけ出したのである。第三に、「衛生學」という表現が割合多く見られるようになり、それは一九〇三年に增訂された『漢英字典』中に現れるだけでなく、さきに擧げたような一連の論著のうちにも現れていた。この言い方が出現したことは、當時の人々がすでに衛生を西洋近代科學の基礎の上に打ち立てられた專門の學問であるとみなしはじめ、主に養生を指す傳統的な衛生と區別していたことを表すだけでなく、生命を衛るという文字通りの意味から離れて、近代衛生學の基礎の上に「衛生」概念を抽象的に使用するための可能性を提供したのである。

ここから分かるように、近代「衛生」概念の最終的な形成にとって、この十數年間は傳統と近代とをつなぐ極めて重要な時期であった。

四　近代的「衛生」概念の確立（一九〇五―一九一一）

光緒三一年（一九〇五）、日本をはじめとする各國の國家衛生行政を參考として、清政府は新たに設立した巡警部警保司に「衛生科」を設けた。翌年には巡警部を民政部に改め、衛生科も衛生司に昇格し「防疫衛生、醫藥の檢查、病院の設置などの處理を掌った[83]」のであった。衛生司の設置はある程度日本に由來するものではあるが、この時期になってこのよう

な機構に「衛生」という名を冠したのは、當然のなりゆきと言うべきである。言い換えれば、たとえ手本としたものが日本ではなく西洋の制度であったとしても、おそらくその機構には「衛生」の名稱が使われていた可能性は十分にあったのである。とはいえ、衛生機構の出現が「衛生」概念の變遷に與えた作用はやはり輕視できない。まず、「衛生」という言葉が國家の正式な行政機關の名稱となったことは、國家がこの言葉を新たな意味で用いることを認めたことを示しており、「衛生」が最終的に健康を守り疾病を豫防するという內容を表した社會の標準的な用語となる上で、直接的な原動力と保證とを提供したのである。つぎに、衛生司の「醫藥を檢查し、病院を設ける」といった職掌の規定は、醫學そのものではなく醫療行政の管理こそが衛生行政の重要な組成部分であることを明確にし、これにより近代における廣義の衛生の內包が確立したのである。

衛生機構の設立が近代的「衛生」概念が確立するプロセスを大いに促進したことは間違いない。光緒末年から民國初期になると、この時期に編纂された辭書からも「衛生」概念の完成形を容易に見つけることができる。一九一一年に出版された『新訂英漢辭典』では、Hygiene、Sanitary などの關連する語彙の解釋にもとからある「保身」や「保生」といった言葉が殘されてはいるものの、「衛生」が際だった位置を占めるようになっていたのはもはや明白であった(84)。先に引いた『辭源』の衛生に關する解說は、近代性が極めて顯著で完備しているだけでなく、「保身」や「保生」といった語はもはやこの辭典には收錄されておらず、「養生」の解說も近代衛生とは關係なくなっている。これらの事實はいずれも、近代衛生事業の標準概念をあらわすものとしての近代的「衛生」概念が既に確立していたことを表しているのは間違いない。

しかしそれ以外にも、衛生概念の確立は少なくとも以下の二つの方面にも現れている。

第一に、「衛生」概念の使用が普及し始めた。「衛生」は以前のようにエリート知識人だけが使用する言葉ではもはやなく、「舊時王謝堂前の燕、飛んで尋常百姓の家に入る」がごとく庶民にも用いられるようになったのである。このことは「衛生」が公文、告示、日用醫書、鄉土志といった民衆と密接に關係する文獻や、さらには竹枝詞、小說と言った通俗文

學作品に至るまで幅廣く登場していることによく現れている。例えば、現在出版されている清末の蘇州と天津の商會檔案には、近代衞生にかかわる公文と告示が多數收錄されており、こういった文書に「衞生」が頻繁に出現している。[85] 清末に出版された上海の各方面の狀況を紹介した實用書『上海指南』も「衞生章程」の項目を設けている。[86] 同時期に發行された傳染病の知識を紹介したパンフレットは、衞生に注意するよう人々に忠告し、「君たち下層勞働者は學問がないので、衞生がいったい何であるかを知らず、ともすれば苦しみにあうので、まことに憐れむべきである。」と述べている。[87] また、當時の『上海鄉土志』では上水道、水路の閉塞、病院といった近代衞生に關する事象について言及する際には、均しく「衞生」という言葉が使われていた。[88] さらに竹枝詞のような民間文學作品にも「衞生」という言葉が現れていた。例として、「工部局」と題する竹枝詞を見てみよう。

その名は工部、西洋人の創るところ、しきりに告示を張って我が人民を戒める。衞生を重んじて街道は潔く、いつも清掃させて塵まで除く。[89]

もっとも注意すべきは商務印書館が光緒三二年（一九〇六）と三四年（一九〇八）に相次いで出版した「衞生小說」――『醫界現形記』（郁聞堯著）と『醫界鏡』（儒林醫隱著）――である。後者についてはまったくの前者の剽竊といって差し支えないが、[90]「衞生小說」としてはむしろこちらの方がその名にふさわしい。前者は「小引」で「衞生」について言及してはいるが、本文でそれほど多く衞生について語っているわけではない。しかし、後者はそれとは異なり、第一回を「開宗明義講生理」と改め、第六回も「張善人入夢論瘟疫」から「張善人衞生談要略」に書き改め、數多くの近代的衞生知識を加えた。例えば、その中の一節にはこのようにある。

通常の衞生の法則にいたっては、とりわけ疫病と關係があるので、いま試みに大事な何點かをあなたがたに聞かせて差し上げましょう。第一に不潔であってはなりません。……以上の各節は、衞生の大略をすこし說明しただけに過ぎませんが、しかしながら要點はここに言い盡くされており、あなたがたは必ずしっかりと心に留め、自ら實踐するだ

けではなく、世の人々にも廣く勸め、衞生の道理を人々に理解させれば、疾病を完全に無くすことは無理としても最終的にそれを減らすことはできるでしょう。[91]

近代的な「衞生」が民衆に密接にかかわる數多の文獻中に出現していることは、この概念が民間社會に深く浸透し、次第に日常用語の一部分となり始めていたことを示している。

第二に、衞生の近代的意味は「衞生學」を媒介としてますます「衞生」概念に緊密に結びつきはじめ、概念の近代的「性質義」[92]を絶え間なく強化したことは、人々にその「性質義」を使用するよう促し、徐々に「生命を衞る」もしくは「養生する」という本來の意味を弱めていった。これに伴い、「衞生」ももはや動詞と目的語の組み合わせでできた名詞として使用されることはなく、健康に有益であるという條件を滿たす狀況（例えば清潔）を示す名詞に徐々に變化した。例えば以下のように。

もともと〔我々の〕賤しい職業を維持して、衞生に有益であることを願っているのです。……ひとたび時間の制限によって餘裕がなくなり糞便を汲み取ることができなくなると、ひどい場合には自ら糞便を運河に投棄してますます水を汚す結果となり、衞生に妨げがあります。[93]

ここでは、衞生は表面的にはなお「生命を衞る」と解釋することが可能であるが、實際には、肥料業の仕事は汚物を收集することであり、直接の結果としては生活環境の清潔を保つだけにすぎない。よって、ここでの衞生は環境が清潔であることを表す名詞になっていると理解できよう。このことは、次の例により明確に表されている。

國家を強くしたいのなら、かならず人民の健康を保たなければならない。人民の健康を守ろうと思うのなら、かならず衞生に注意しなければならない。[94]

ここでの衞生が清潔といった人民の健康を保全する行爲や狀況を指しているのはもはや明らかである。一方で、以下の例で使われている衞生は「衞生學」の略であって、現代中國語で「講衞生」という言い方が常用される前觸れであると言

って良い。

上海に何年か住んでいたが、疫病が流行しているのを見て、醫道が腐敗し衛生が重んじられない（衛生之不講）ことに心をいため、わが國の醫療界の狀況が日々惡化していくことをひそかに嘆いたのであった。[95]その性質義が絕え間なく顯在化するにしたがい、「衛生」を形容詞として用いる狀況もあらわれはじめた。[96]たとえば、「西洋人はかつて我々中國人は衛生の道理をわきまえていないと言っていた。……ここまで言えば、私は同胞が衛生的な法則（衛生法則）を重視することを願わないわけにはいかない。[97]」のように。

以上のことから、概念の內涵、普及程度、さらには使用方式などいずれの面においても、「衛生」は傳統から近代への轉化を遂げ、そこに近代「衛生」概念の確立が表されていると言うべきであろう。この變化の過程は、新しい知識を傳統の基盤に嵌め込むという方法を通して次第に自然と完成したものであって、傳統ときっぱり斷絕するような現象はまだ現れていなかった。ゆえに、近代的意味での「衛生」は傳統の要素が全くなくなってしまったわけではなく、しかもこの時に至ってさえ、さらにはその後に及んでも、傳統的な意味で「衛生」という言葉を用いる場合が依然として多かった。それだけでなく、人々はすでに社會と國家の衛生に對する責任を普遍的に認めていたにもかかわらず、國家や地方レベルでの衛生行政が全くなされていないか、あったとしても微弱なものにとどまっていると認識していたために、往々にして個人レベルの衛生の重要性をも強調した。[98]しかし以前とは異なり、たとえ個人の衛生であっても、もはや隣人や社會が口を出さずに濟む私事ではなく、社會やときには國家が各種の衛生知識を大々的に宣傳せねばならなくなっていたのである。まさにこのような理由により、中國語全體の中での「衛生」の近代性は、純粹かつ鮮明というには明らかに不十分で、「衛生」の含む意味は往々にして人々に混沌として、繁雜な感覺を與えていたのである。

結　語

これまで述べ來たったことをまとめると以下のような結論が導き出せる。

まず、東アジア世界で近代衛生概念が最初に現れたのは日本であるが、現代中國語の「衛生」を單純に日本語起源の言葉であると見なすことはできない。當然「僑詞來歸」であるとも言えない。實際には、この言葉は中國社會の近代化の過程で、西洋衛生知識の流入、日本近代の「衛生」用語と衛生制度の紹介、さらには中國士人による傳統の再解釋、再利用と言った様々な要素が複合的に作用したことによって、時を追うごとに自然と形成されてきたのである。傳統から近代への變化は、日本の「衛生」の影響を大いに受けてはいるが、同時にある程度獨立した發展の軌跡をたどっているのである。

つぎに、近代「衛生」概念の變動は、おおむね光緒初年から始まる。日清戰爭以前には、すでに基本的に近代衛生概念が備えるべき內容をひととおり含んだ「衛生」が個々の文脈の中で使われることもあった。しかし、これは、中國社會と國家の主體的な追求によるものでは全くなく、その影響の及ぶところも、基本的に直接洋務にかかわる個別のせまい領域に限られていた。全體的にみれば、社會での「衛生」という言葉の使い方にはまだ根本的な變化は現れておらず、こういった變動は一筋の伏流でしかなかった。

さらには、日清戰爭以降には、日本の影響が強まり中國社會の近代衛生事業に對する姿勢も次第に能動的になったことによって衛生概念の變動の流れも表面化し、近代的な意味を持つ衛生概念が中國人の著作の中にますます多く現れだした。それと同時に、丁福保の『衛生學問答』の出版發行、そして「衛生」と「保身」「養生」といった言葉の混用、「衛民生」といった解釋の出現、および「衛生學」といった表現が出現し使用されるといった現象があらわれたことは、近代衛生概念の確立において傳統と近代とをつなぐ鍵となる作用を引き起こしたと言えよう。

また、一九〇五年の國家衛生行政機關の設立は、「衛生」が健康をまもり、疫病を豫防するという內容を表す社會の標

準的な用語へと發展するのを、さらに後押しした。「衞生」概念も徐々にエリートだけでなく民間にも用いられるようになり、そのうえ衞生の近代的意味が「衞生」概念上に日を追って緊密に結びつくにつれて、その近代的「性質義」は絶え間なく強まった。清末民初にいたって、概念の内涵、普及程度、もしくは使用方式と言った面から見て、近代的意味の「衞生」概念は既に確立したと言うべきである。しかし、この變化は、往々にして新しい知識を傳統の土臺の上にはめ込む方法を通して、徐々に自然と完成したので、傳統が徹底的に清算、拂拭されたわけではなく、このために清末以降の「衞生」の持つ意味は相當複雜で多様なものとなった。

最後に、「衞生」はどうやって傳統の殻を破り、最終的に近代衞生を表す標準概念となったのか、という問題について、ここでまた簡單に論じておきたい。第一、「衞生」という言葉の傳統的な含意と用法と關わりがある。長與專齋が感じたような「衞生」は比較的格調高いという要素だけではなく、この言葉は意味の含むところが比較的廣くて曖昧であり、さらにどちらかというと能動性がある、という特徴を備えている。養生の代わりに用いられることもあったが、養生には備わっていない含意をも含んでいるようだ。この點において、近代の衞生と大變よく似ている。また、傳統においても、衞生は見慣れぬ言葉ではないものの、常用される言葉とまではいかず、そのことが、人々がこの言葉を借用して再解釋し、利用するのに役立ったのであった。その他の關連する語句は、例えば養生は養の含意があまりにもはっきりしているので、近代衞生中の公共環境の保護や、醫療行政の管理などといった社會性を包み込むことが困難であった。「保身」であれば、字面上の解釋だけなら筋が通っているのだが、古典では「明哲保身」のような身體の健康とは全く關係のない文脈に用いられることが多く、どちらかというと受け入れられにくいものであった。第二に、ある種偶然の個人的要素とも關わりがある。近代的な意味での「衞生」がまずはフライヤーと琴隱詞人の採用するところとなったのは、まちがいなく一定の偶然性があった。どのような言葉を用いるかは、どうしても個人の好みに左右されてしまうが、「衞生」がひとたび使われるようになると、フライヤーが特に好んで用いるようになり、徐々に初期に『儒門醫學』で用いられていた「保身」など

の用語の座を奪うようになっていった。同じ時期に趙元益が書きあらわした多くの譯書は、あいかわらず「保身」「保生」といった言葉を使い續けてはいた。しかし、あいにくフライヤーと彼の譯した書物が當時の社會に與えた影響はそれを凌駕するものがあったのである。第三は、日本の「衞生」との關係である。この點については、本稿ですでに充分述べてきた。繰り返し述べるまでもなかろう。

註

（1）陳方之『衞生學與衞生行政』（上海、商務印書館、一九三四年）第二―三頁。

（2）彭文祖『盲人瞎馬之新名詞』（東京、秀光舍、一九一五年）第一六四―一七五頁。

（3）沈國威『近代中日語彙交流史――新漢語の生成と受容』（東京、笠間書院、一九九四年）第一一五―一二〇頁。

（4）馮天瑜『新語探源――中西日文化互動與近代漢語術語的生成』（北京、中華書局、二〇〇四年）第五九九―六〇一頁。

（5）劉士永「一九三〇年代以前日治時期臺灣醫學的特質」（『臺灣史研究』第四卷第一期、一九九七年）第一〇〇―一〇二頁。

（6）雷祥麟「衞生爲何不是保衞生命――民國時期另類的衞生、自我與疾病」（『臺灣社會研究季刊』第五四期、二〇〇四年）第一七―五九頁。

（7）Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity: Meanings of Health and Disease in Treaty-port China*, Berkeley: University of California Press, 2004, とくに pp. 15-20, pp. 104-164.

（8）「若趎之聞大道、譬猶飲藥以加病也、趎願聞衞生之經而已矣。」（陳鼓應注譯『莊子今注今譯』雜篇・庚桑楚第二十三、北京、中華書局、一九八三年、第五九九頁）。

（9）羅竹風主編『漢語大詞典』第三卷（上海、漢語大詞典出版社、二〇〇一年）第一〇九四頁。

（10）重複している部分があるだけでなく、一部は「衞生」と關係がない。例えば、人名であったり、「某衞生員」を指していたりする。また關係はあるものの、「善衞生靈」「善衞生民之命」のように「衞生」という獨立した語句の用例と見なせないものもある。

（11）四大小説と三言兩拍のほかにも『金瓶梅』、『醒世姻緣傳』、『兒女英雄傳』、『聊齋志異』、『儒林外史』、『鏡花緣』、『三俠五義』、『封神演義』、『東周列國志』、『閱微草堂筆記』等の小説を含む。

（12）『宋書』卷六四「鄭鮮之傳」。

（13）楊士奇『東里續集』卷一四「醫經小學序」。

（14）彭蘊章『歸樸龕叢稿』巻六「愼疾芻言序」（『彭文敬公全集』、同治七年刊本）第一四ａ頁。
（15）唐愼微『證類本草』「重修證類本草序」。
（16）洪適『盤洲文集』巻六九「妻子保安青詞」。
（17）『辭源』（上海、商務印書館、一九一五年版）申集第一五八―一五九頁。
（18）陳方之『衛生學與衛生行政』、第八―一一頁。
（19）たとえば、川原汎『衛生學綱目』（新訂四版）（東京、半田屋醫籍商店、一九〇二年）第二頁。藤浪剛一『日本衛生史』（東京、日新書院、一九四二年）第一四二―一四三頁などがある。
（20）長與專齋「松香私志」（小川鼎三、酒井シヅ校注『松本順自傳・長與專齋自傳』、東京、平凡社、一九八〇年）第一三三―一三九頁。そのほかに小野芳朗『清潔の近代――「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ』（講談社、一九九七年）第九八―一〇五頁もある。
（21）藤浪剛一『日本衛生史』、第一四二頁。劉士永「〝清潔〟、〝衛生〟與〝保健〟――日治時期臺灣社會公共衛生觀念之轉變」（『臺灣史研究』第八巻第一期、二〇〇一年）。
（22）例えば、光緒三年に駐日公使として來日した何如璋もこの點に氣づいていた。「（光緒三年十月丙申、長崎）俗好潔、街衢均砌以石、時時掃滌。」（何如璋『使東述略』、鍾叔河主編『走向世界叢書』、長沙、岳麓書院、一九八五年、第九一頁）。
（23）出版社校點『郭嵩燾日記』第三巻（長沙、湖南人民出版社、一九八二年）第三一九―三二〇頁。
（24）劉雨珍「日本國志・前言」（黃遵憲『日本國志』、上海、上海古籍出版社、二〇〇一年影印版、第一九―二三頁）。
（25）黃遵憲『日本國志』巻一四「職官志二」、第一六四頁。
（26）黃遵憲『日本國志』巻一四「職官志二」、第一七五頁。
（27）傅雲龍『游歷日本圖經餘記』（鍾叔河主編『走向世界叢書』、長沙、岳麓書院一九八五年）第二一五頁。
（28）沈國威『近代中日語彙交流史』、第一一八―一一九頁。
（29）沈國威『近代中日語彙交流史』、第一一〇頁。
（30）R. Morrison, 『五車韻府』(*A Dictionary of the Chinese and English Language*), Macao, China: Printed at the Honorable East India Company's Press, by P. P. Thomas, 1819-1820. 第九七五頁。
（31）S. Wells Williams 編譯『漢英韻府』(*A Syllabic Dictionary of the Chinese Language*)、同治十三年（一八七四）美華書院初刊本、Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 1896, 一〇五四頁。
（32）W. Lobscheid『英華字典』(*English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation*), Hong Kong: Daily Press, 1866, 東京、千和勢出版部、東京美華書院、一九九六年復刻、第九七〇、一五三五頁。
（33）『格致略論・論人類性情與源流』（傅蘭雅輯『格致彙編』、光緒二年一二月、第四ａ―五ｂ頁）。
（34）海得蘭［Frederick W. Headland］撰、傅蘭雅口譯、趙元益筆述『儒門醫學』巻上、光緒二年刊本、第二ａ―三ｂ

頁。

（35）海得蘭撰、傅蘭雅口譯、趙元益筆述『儒門醫學』附卷「愼疾要言」、第一a頁。

（36）花之安［Ernst Faber］『自西徂東』（上海、上海書店出版社、二〇〇二年）第四—七頁。

（37）嘉約翰［John Glasgow Kerr］口譯、海琴氏校正『衛生要旨』、光緒九年刊本（京都大學附屬圖書館富士川文庫所藏）、第三四b—三五a頁。

（38）Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity*, pp. 108-125, 131-135.

（39）「批閱新書」『重刻化學衛生論』（『格致彙編』光緒十七年春季）第四四b頁。

（40）傅蘭雅譯『化學衛生論』光緒七年格致彙編館刊本（京都大學附屬圖書館富士川文庫所藏）。

（41）琴隱詞人（欒學謙）の序文ではこの點について説明がなされている。「人之安然以生者、固終生由之、而不知其所以生之道、又烏知所以就安利避危殆以無負天地好生之德。至有戕其生、蹇其生、昧昧焉而不知所悔者、夫豈天之道哉。此書之作、所以闢人之聰明、示人以利害、所裨誠非少矣。」（傅蘭雅譯『化學衛生論』序、第一b頁）。

（42）Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity*, pp. 118-125. 王揚宗『傅蘭雅與近代中國的科學啓蒙』（北京、科學出版社、二〇〇〇年）第六二—六四頁、一三二頁。

（43）史本守［Herbert Spencer］著、顏永京譯『肄業要覽』、光緒二三年質學會重刊本、第一二a—一二b、一四b頁。

（44）嘉約翰口譯、海琴氏校正『衛生要旨』「凡例」、第二b頁。

（45）嘉約翰口譯、海琴氏校正『衛生要旨』、第三四b—三五a、三七a—三八b頁。

（46）Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity*, p. 131.

（47）傅蘭雅輯『居宅衛生論』一七、光緒一六年刊本、第三三b頁。

（48）Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity*, pp. 124-125.

（49）孫寶瑄『忘山廬日記』（上海、上海古籍出版社、一九八三年）第一四五頁。

（50）『格致新報』第一〇册、光緒二四年四月二一日、第一〇頁。

（51）傅蘭雅譯『幼童衛生編』「序」、光緒二〇年格致書室刊本、第一頁。

（52）傅蘭雅輯『居宅衛生論』一四、第二九b頁。

（53）傅蘭雅輯『格致彙編』、光緒一七年春季、第四一b頁。

（54）拙稿「清代江南的衛生觀念和行爲及其近代變動初探」（『清史研究』二〇〇六年第二期揭載豫定）。

（55）李平書『李平書七十自敘』（上海、上海古籍出版社、一九八九年）第一七頁。

（56）「勸用自來水示」、『申報』光緒一〇年五月一二日、第二—三頁。

（57）この本については、以下の研究でより詳しい紹介がなされている。Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity*, pp. 127-130. 管林「鄭觀應的道教思想及其養生之道」（『嶺南文史』二〇〇二年第四期）第五—八頁。鄭洪「鄭觀應的醫事活動

與醫學思想」（『中華醫史雜誌』二〇〇三年第四期）第一三一—一三六頁。

（58）鄭觀應『盛世危言後編』巻一「道術」（夏東元編『鄭觀應集』下冊、上海人民出版社、一九八八年、第一五〇頁）。

（59）鄭觀應『盛世危言後編』巻四「政治」（夏東元編『鄭觀應集』下冊、第三五〇頁）。

（60）鄭觀應『盛世危言』（夏東元編『鄭觀應集』上冊、上海人民出版社、一九八二年、第二六、一五六、六六〇—六六三頁）。

（61）日本の衛生の影響が強まり、中國社會の近代衛生に對する態度が日々積極的になっていったことについては、現在筆者は「中國近世的糞穢處置及其近代變遷——兼論近代公共衛生觀念的形成」という文章を發表する豫定である。

（62）こういった用語を使う例は大變に多い。「保身」「保生」に關して言えば、一九〇〇年前後に出版された『內科理法』前編巻五「保身法」（虎伯撰、舒高第口譯、趙元益筆述、江南製造局光緒中刊本）や『保全生命論』（古蘭肥勒撰、秀耀春［F. Huberty James］口譯、趙元益筆述、光緒二七年刊本）といった書物の中にとりわけ集中して現れている。「養生」については、『皇朝經世文統編』に收錄される「論養生」などの「養生」という言葉を用いて近代衛生事業を議論する文章を參照されたい。（邵之棠『皇朝經世文統編』巻九九「格物部五・醫」、沈雲龍主編『近代中國史料叢刊續編』七二—七一九、臺北、文海出版社、一九八〇年、據光緒二十七年石印本影印、第四〇六一—四〇六三頁）。

（63）W. Lobscheid 原著、F. Kingsell 增訂『新增英華字典』（*A Dictionary of the English and Chinese Languages with the Merchant and Mandarin Pronunciation*, 1897）、那須雅之監修『近代英華・華英辭書集成』第七卷、東京、太空社、一九九八年、第五一三頁。W. Lobscheid 原著、企英譯書館增訂『華英音韻字典集成』（*A English and Chinese Pronouncing Dictionary*, 1903）、那須雅之監修『近代英華・華英辭書集成』第一一卷、第八五六頁。

（64）W. Lobscheid 原著、F. Kingsell 增訂『新增英華字典』（*A Dictionary of the English and Chinese Languages with the Merchant and Mandarin Pronunciation*, 1897）、那須雅之監修『近代英華・華英辭書集成』第八卷、第八一七頁。

（65）W. Lobscheid 原著、企英譯書館增訂『華英音韻字典集成』（*A English and Chinese Pronouncing Dictionary*, 1903）、那須雅之監修『近代英華・華英辭書集成』第一一卷、第四〇八頁。

（66）任琮「忘山廬日記・前言」、孫寶瑄『忘山廬日記』、第一—二頁。

（67）孫寶瑄『忘山廬日記』、第一二一、一四五頁。

（68）孫寶瑄『忘山廬日記』、第三四〇、三七五—三七六、三九六—三九七頁。

（69）孫寶瑄『忘山廬日記』、第五六五—五六七、六一三—六一四、六九一—六九三、七三〇、七五五頁。

（70）丁福保『疇隱居士自訂年譜』（『北京圖書館館藏珍本年譜

叢刊』第一九七册、北京、北京圖書館出版社、一九九四年）第七七―七八頁。

（71）牛亞華、馮立升「丁福保與近代中日醫學交流」（『中國科技史料』二〇〇四年第四期）第三一五―三二八頁。

（72）彼はこの時期にはまだ日本語を學び始めてはいなかった。（丁福保『疇隱居士自訂年譜』、第七八―七九頁）。

（73）丁福保『衛生學問答』第一章「總論」、光緒二七年重刊本、第一ａ頁。

（74）丁福保『衛生學問答』第一章「總論」、第四ｂ頁。

（75）「化學當學論」（邵之棠『皇朝經世文統編』卷九五「格致部一・格致」、第一三ｂ頁）。

（76）陳虬『瘟疫霍亂答問』（光緒二七年）（曹炳章校刊『中國醫學大成』第四册、北京、中國中醫古籍出版社、一九九五年、第七〇六頁）。

（77）邵之棠『皇朝經世文統編』卷九九「格物部五・醫學・西醫」、第四〇一〇頁。

（78）邵之棠『皇朝經世文統編』卷九九「格物部五・醫學・衛生說」、第四〇五八頁。

（79）「保身愼疾芻言」（光緒二九年）（張德彝纂『醒目清心錄』卷五、北京、全國圖書館縮微文獻中心、二〇〇四年、第一册、第五二七頁）。

（80）梁啓超『飲冰室文集類編・醫學善會序』（東京、下河邊半五郎、一九〇四年刊行本）第七〇九頁。

（81）梁啓超「地球人事記」（『清議報』第四一册、臺北、成文出版社、一九六七年影印版、第一八ｂ頁）。

（82）張德彝纂『醒目清心錄』卷二、第一册、第一五五頁。

（83）劉錦藻『清朝續文獻通考』卷一一九「職官五」（杭州、浙江古籍出版社、一九八八年）第八七九〇―八七九一頁。

（84）『新訂英漢辭典』（*An Abridged English and Chinese Dictionary*）Shanghai, The Commercial Press, Ltd., 1911, 第五六九、一〇四四頁。

（85）『蘇州商會檔案叢編（一九〇五年―一九一一年）』第一輯（武漢、華中師範大學出版社、一九九一年）第六八五―六九九頁。『天津商會檔案彙編（一九〇三―一九一一）』下册（天津、天津人民出版社、一九八九年）第二二七四―二二八三頁。

（86）『上海指南』（增訂四版）卷二（上海、商務印書館、一九一〇年）第二六ｂ―三〇ｂ頁。

（87）「傳染病四要抉微」（陳修園編著『陳修園醫書七十二種』第四册、上海、上海書店、一九八八年、第二五三一頁）。

（88）李惟清『上海鄉土志』（一九〇七年初版）（上海、上海古籍出版社、一九八九年）第九〇、九九、一〇六頁。

（89）顧安主人『滬江商業市景詞』卷一（一九〇六年初版）（顧炳權編著『上海洋場竹枝詞』、上海、上海書店出版社、一九九六年、第一〇〇頁）。

（90）後者は主人公の名前と出身地こそ前者と異なっているが、それ以外のストーリーや章立て、さらには文章表現に至るまでほとんど同一のものであった。

（91）『醫界鏡』（金成浦、啓明圭編『私家祕藏小說百部』第七十六卷、呼和浩特、遠方出版社、內蒙古大學出版社、二

○○一年）第一回、第七頁、および第六回、第三七―三八頁。

（92）性質義とは語句に含まれる事物の性質を表す意味のこと。より具體的に言えば、恒久的、持久的で、他の事物と區別する特徴を示す意味のことである。また特徴義とも言う。最も典型的なものは形容詞の性質義であるが、名詞や一部の動詞にも現れることがある。例ば、鐵という名詞には「固くて丈夫である」という性質義が含まれる。

（93）「肥塗業商人稟呈」（光緒三四年二月）（『蘇州商會檔案叢編（一九〇五年―一九一一年）』第一輯、第六九一頁）。

（94）劉庭春等「日本各政治機構參觀詳記」（劉雪梅、劉雨珍編『日本政法考察記』、上海、上海古籍出版社、二〇〇二年、影印光緒三三年日本印刷本、第三三八頁）。

（95）郁聞堯『醫界現形記』（石家莊、花山文藝出版社、一九九六年）第二三三頁。

（96）名詞が形容詞に轉化する際に基礎となるのは名詞の性質義である。性質義の強弱と形容詞に轉化する可能性はまさに正比例するので、抽象名詞は最も形容詞に轉化しやすい。（譚景春「名詞詞類轉變的語義基礎及相關問題」、『中國語文』一九九八年第五期、第三六八―三七七頁）。

（97）儒林醫隱『醫界鏡』第一回、第七―八頁。

（98）たとえば、清末の傳染病豫防に關するパンフレットでは、公衆豫防の方法について「公眾預防法、無非隔離・消毒・清潔・檢疫四端、此與中國現狀、尙難實行之、姑略之。」（「傳染病四要抉微」、第二五三一―二五三三頁）と言及して、個人の豫防に重點を置いて紹介している。前述の衛生小說『醫界鏡』の前書きでも以下のように明言している。「說到此間、我不得不望我的同胞講究些衛生法則、那公共衛生權柄是在官紳的、至于個人衛生、只要我自己時時刻刻研究、就得了。」（『醫界鏡』第一回、第七―八頁）。

〔謝辭〕
まずは恩師である夫馬進先生に心より感謝申し上げます。21世紀COE研究會「東アジアにおける國際秩序と交流の歷史的研究」第三回國際シンポジウム「東アジアにおける前近代と近代の一接點――港灣都市――」（二〇〇五年一月八日・九日）において發表の機會を與えていただいたことが、本稿を執筆する直接の動機となりました。同時に報告にあたっては、狹間直樹、熊月之、伍躍、小濱正子、太田出、箱田惠子、早川敦等の各氏から數多くの手助けや助言をいただいたことに大變感謝いたします。さらに、發表を終えて間もないうちに、京都を訪問された中國人民大學の黃興濤教授に幸いにもお會いすることができたことを、特に言及しなければなりません。中國近代の新名詞について長年にわたり研究され、多くの成果をお持ちである先生と二日間にわたって語り合うことができ、その際に先生から惜しみない助言を頂いたおかげで、研究の情報、構想、資料の使い方などの面で多大な啓發を受けることができました。ここに謹んで感謝申し上げます。もちろん、本稿に誤りがあれば責任はすべて筆者自身にあります。

payment in silver itself was predicated of necessity on additional grain supply. At least from the second half of the 16th century onward, the commodity that fulfilled the demand is what is generally called surplus grain 餘米. The term surplus grain refers to the unused remainder of the grains collected as an additional tax to offset the cost of shipping tribute grain. The existence of the surplus grain itself, on the one hand, well represents the character of the Chinese governmental finance system, which maintained its elasticity solely through such supplementary, additional taxes. It can be surmised that the increase in the dispersal of silver from the *Taicang* Treasury 太倉 following the second half of the 16th century gave a great impetus to the outflow of surplus grain from Beijing, and ultimately it was those directly involved in the governmental grain transport who responded nimbly to the gap in demand. In a sense, what the expansion of silver economy signifies was not just the development of purely spontaneous market economy, but a sort of amalgam of free trade and command economy, which continues to exist over a long period.

ON THE EVOLUTION OF THE CONCEPT OF *WEISHENG* 衛生 IN THE LATER QING DYNASTY

Yu Xinzhong

In studies of the modern history of Chinese sanitation, the evolution and the differences of the implications of the concept of *weisheng* 衛生 in history are an issue that has raised a certain degree of concern but has not yet been clarified. This study attempts to make a clear explanation of the concept of *weisheng* in the later period of the Qing dynasty based on the literature and previous studies of hygiene.

This study argues that in East Asia, even though the concept of *eisei* 衛生 first appeared in Japan, the word *weisheng,* written 卫生 in modern Chinese, cannot simply be regarded as a loan word from Japanese. In fact, the concept formed gradually and naturally under the force of various factors, such as the entrance of western knowledge about sanitation, the import of the term *eisei* and sanitation systems from Japan, and the re-interpretation and application of traditions by Chinese intellectuals.

These changes in the concept had begun in the earlier Guangxu era. In the period before 1894, in certain specific contexts, the concept *weisheng* had almost

completely encompassed the connotations that it would have in modern times. However, it did not have conspicuous influence, remaining basically an undercurrent. After the Sino-Japanese War in 1894, with the increase of Japanese influence on China and the gradual positive changes in Chinese society's attitudes toward matters of modern sanitation, the undercurrent of change in the concept *weisheng* began to come to the surface. The concept of *weisheng* in the modern sense started to appear more and more frequently in Chinese literature. The establishment of the national sanitation administrative institution in 1905 further advanced the process in which *weisheng* became the standard social term that implied protecting public health and preventing disease.

One could say that the modern concept of *weisheng* had already been established both in terms of its connotations and popularity, as well as the manner it was used by the end of the Qing dynasty and the beginning of the Republic of China. However, this was an evolutionary process that was completed gradually and naturally with new knowledge becoming embedded in the foundation of tradition. Traditional ideas about sanitation remained intact; therefore the implications of the concept of *weisheng* were mixed and varied after the late Qing. In conclusion, this study also discusses briefly how the concept *weisheng* came into prominence and finally become the standard term in the modern sense.